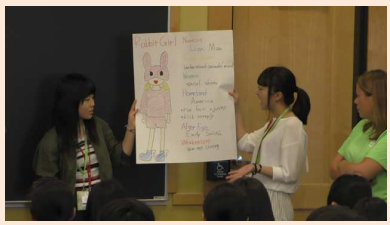
## ■現地研修６日目：　７月１４日（金）

研修６日目。いよいよタフツ大学でのサマープログラムは最終日です。毎日のタイトスケジュールのなか、時間を無駄にしまいと小走りでの上り下りを繰り返したカフェテリア、そしてデイビス駅までの道程は、まさに日々他国生や大学生へアタックしては撃沈し、そして再チャレンジする生徒たちの心情を表しているようで（と思うのは私だけかもしれませんが・・）、往復するのも明日が最後と思うとどこか感慨深いものがあります。

昨晩のミーティングを受けてか、今朝のカフェテリアでの動きにはさらに拍車がかかり、同プログラム参加の他校責任者からも「またいっそう勢いが増しましたね、何かあったのですか」とのコメント。また、食事中に幾度となく中部生徒たちのアタックを受け、その都度快くテーブルをともにしてくれた現地アメリカ人高校生グループの責任者や、他プログラム（Embassy 以外）の英語教員などからも、「あの子らは君らの生徒か？　毎日楽しい時間を過ごしたよ。素敵な生徒を連れてきてくれてありがとう」や、「英語クラス以外でも学ぼうとする素晴らしい生徒たちだね」と、先生や我々のいるテーブルにわざわざ声をかけてくれることも少なくありませんでした。おそらくは同じ質問や話を何度も受けていただいたはずですが、生徒たちの気持ちに応え、食事中でさえも親身になって彼らの英語を理解しようと耳を傾け、言いたいことを汲んで答えてくれ、そして何より自分たちのの時間を割いて対応してくれた彼らの優しさ、ホスピタリティーこそ、生徒たちには感じてほしいと強く思います。リュックを背負い、飲み物と食べかけの食事をもってうろうろする団体、数日前は明らかに挙動不審・・でしたが、今ではカフェの名物です。

最後のセッションとなった英語クラスでもそれぞれに後悔を持ち帰らぬよう、より一層前のめりでの授業参加、そして交流が行われたようです。また、修了セレモニーの場では、全クラスが集い、各クラスからのファイナル・プレゼンテーションが行われました。「日米の司法制度の違い」、「過去と現在の音楽について」をテーマとして取り上げたグループ、また別クラスは「各国のいじめの問題とその違い（ニモの劇をやりながら）」と、難しいテーマにも果敢に臨み、しっかりと仕上げてきました。その他、研修を振り返り「タフツでの印象的なこと」、「アメリカの文化やスラングに関してのクイズショー」「タフツでの生活（寸劇）」、「自分たちで作ったヒーロー紹介」など、それぞれに創意工夫し、プログラム最後のクラスが終了となりました。



本日の午後は、急遽組まれた次の二つのセッションにて、さらに過密な（充実した）プログラムとなりました。まず、13 時 45 分より物情報専攻の「王　青波（おう　せいは）」さんとの懇談会を実施。都立高校出身、一浪を経て東大へ入学。合格へのモチベーションは、絶対に負けたくない（友達と自分に）、そして諦めないという強い気持ちにあったと仰っていました。また、高 3 までサッカーに打ち込み、部活動での理不尽で厳しい経験も大きな糧となり、定期考査など常に「競争を楽しむ」こともモチベーションの一つ、として語ってくれたことが印象的でした。

そんな彼でさえ、高校時代にしておくべきこと、しておけばよかったことは？の問いに、「もっと勉強しておけばよかった」との回答。公立高校出身、部活動にも全力投球、継続した努力と強い気概が今の礎であったことを感じます。ハーバードには考えられないような天才（と呼ばれる）もたくさんいるが、そのバックグラウンドには人一倍の努力があることは間違いない、とも語っていました。その理由としては、「ある専門分野のずばぬけた知識はもちろんだが、それ以外のあらゆる分野にも精通し、いろいろな切り口でアプローチでき、また答えが出せる力、これは常に学習していなければ培われない」と。年齢的にも生徒に近い王さんからのアドバイス、及び受験勉強での体験談（コツ、スキル等）は、生徒目線で非常に腑に落ちやすく、50 分ほどの限られたセッションの間、質問が止むことはありませんでした。

その後、タフツ大学のサマーセッションに来ている 6 名の日本人の方々にお時間をいただくことができました。なんと、彼らのうち 5 名は 8 月末より「The Fletcher School of Law and Diplomacy（通称：フレッチャー・スクール）」に留学するとのこと（※同スクールは、1933 年にハーバード大学とタフツ大学の合同プロジェクトによって米国で初めて創設された国際関係学の専門大学院。国際関係学の分野において世界最高のスクールの一つと評されています）。現在の所属をうかがうと、国会図書館（調査及び立法考査局外交防衛課）、経済産業省（2 名）、外務省北米局、防衛省、そして獣医師、と錚々たる経歴をお持ちの方々（20 代後半～30 代）にお会いし、1 時間ほどの懇談会の時間をいただきました。

きっかけは、やはりカフェテリアでした。たまたまお声掛けし話をする機会があり、本研修への関心をお持ちいただきました。また、その後テーブルを共にさせていただいた数名の生徒の意欲にも感銘をうけられ、快く今回の場設定に協力いただけることに。さらにはその輪を友人にも広げていただき、上記の通りこれからの日本を動かしていくであろう人たちとの贅沢な時間を作ることができました。与えられたものをこなすだけでなく、チャンスをつかみにいこうとするアクションが、周囲を動かし、自分の研修、あるいは自分たちの研修を作っていくこと、タフツ大学ならではの環境も相まって、今回実感することにもなったでしょう。まさにこのアメリカ研修の醍醐味、本質であり、生徒たちに期待をしてきたことでもありました。約 1 時間、全員ののめり込み具合の凄さといえば、本研修で一番といってもいいでしょう。それぞれに質問した内容、得た情報については、帰国後に各生徒からの報告、フィードバックをご期待ください。本日のセッションはこれで終わりません。夕食後は、マーケティング、医療系の学会コーディネートなど、幅広く事業を手掛ける会社を自ら立上げられた「松川原　氏」より、日米双方でのビジネス経験と活躍された実績から、「グローバル人材／今後必要とされるその資質、能力」、「人生を切り開く鍵」をテーマに、アツいプレゼンをいただきました。どのような人材が今後必要とされていくのかについて、自ら多くの挫折を味わってきた彼の体験と、20 年以上住むアメリカから客観的にみる日本（大学や教育について他国比較）、多くの事例を挙げながら生徒に問いかけ、力強い提言をいただきました。現在のダイナミックな経済の動き、企業戦略などから、つまりこれから必要とされるのは、「問題発見能力、解決能力、創造能力、構想力」だと。多くの紆余曲折、どん底に至るほどの挫折を味わい、今を築いた松川原氏ならではの深い経験、厚みのある言葉からの訴えは、生徒に今の自分と将来をより強く考える機会を与えるのに十分な迫力でありました。「『トライ　&　エラー』を繰り返して、自分自身を見極める努力をしてほしい。」「安定を求めるな、君たちは安定をつくる側。今あるレールに乗るな、レールを作るんだ。孤立を恐れるな」、と強烈なエールをいただき、松川原氏との 1 時間 45 分のセッションはあっという間に終わりました。松川原さんには、明日午前にハーバード・メインキャンパスのツアーを行っていただきます。

その後、昨日のミーティングを受けて、タフツでの最後の一日をどう過ごしたのか、それぞれに思いをもって取り組んだこと、あるいは研修を通じてまだまだできなかった自分自身への悔しさなど、30 分ほどに限った時間のなかで意見を出してもらいました。初日からすると手を挙げる生徒の顔触れにも違いが見えてきました。コメントのほとんどは、研修の 3 大テーマのうちの 2 つ（コミュニケーション能力の伸長、国際性の涵養）に言及されていました。3 つ目の「リーダーとしての意識」についての言及がなかったことが残念でしたが、明日予定されている班別自主研修成功へ向けて、彼らが考えるべき一番の課題はこの 3 つ目テーマであることはよくわかっています。行動してくれることを期待します。